



**Data**

監督：イェスバ・W・ネルスン  
 出演：アルバート・ルズベク・リンハート  
 ハーラル・カイサー・ヘアマ  
 ンラース・ミケルセン  
 ソフィー・グローベル

## 👁️👁️ みどころ

民主主義があまねく行き渡った今の日本国では、「先生の権威」はガタ落ちだし、スパルタ教育も体罰もありえない。しかし、戦前は？明治時代は？しかして、日本が高度経済成長に向かった1960年代後半、ナチス・ドイツの支配から解放されて約20年を経たデンマークの首都コペンハーゲンにある少年養護施設における、貧しい2人の兄弟への教育は・・・？

アメリカの宇宙飛行士ニール・アームストロングが、人類史上はじめて月面着陸したのは1969年。そんな中、10歳の弟が宇宙飛行士になる夢を持ったのは当然だが、さて厳しい養護施設の中、そんな夢の実現は如何に・・・？

本作のクライマックスで見る「スパルタクスの反乱」とも共通する2人の兄弟の反乱劇に注目しながら、教育のありかたをしっかりと考えたい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■ 実話に基づく物語は『オリバー・ツイスト』現代版？ ■□■

イギリスの文豪チャールズ・ディケンズの名作『オリバー・ツイスト』は、1830年代のロンドンを舞台とし、産業革命の嵐の中で翻弄される底辺の子供たちを主人公にした骨太ドラマで、世界文学全集の一冊。それを、ロマン・ポランスキー監督が映画化したのが、『オリバー・ツイスト』（05年）（『シネマルーム9』273頁参照）だ。その主人公は、養育院で育ち、9歳になった今、救貧院に戻された男の子オリバー。1830年代のロンドンには、産業革命真っ盛りの大都市だったが、今のような福祉国家や青少年保護の理念はなく、まさに弱肉強食の資本主義が貫徹されていた。したがって、孤児のオリバーが、養育院や救貧院で育てられたのはラッキー。そう思えなくもないが、そこはまるで奴隷状

態のような長い労働時間とまずい食事が実態だったから、そこで描かれたオリバーたちの生きざまは・・・？

それから約130年。第1次世界大戦、第2次世界大戦を経験し、東西冷戦の時代も終えた1967年。1967年は、私が大学に入学した年で、日本ではこれから高度経済成長に向かう昭和の良き時代だったが、デンマークの首都コペンハーゲンの養護施設はオリバーの時代からいかに進歩しているの・・・？本作はコペンハーゲンに実際にあった少年養護施設で起きた実話にもとづく物語らしい。ナチス・ドイツの支配から解放されて約20年、コペンハーゲンでも、もはや戦後の色彩はなくなっていたが、ヘック（ラース・ミケルセン）を校長とする少年養護施設の実態は？

## ■□■ 2人の主人公は？養護施設の実態は？ ■□■

本作の主人公は、母子家庭で育った13歳の兄エリック（アルバト・ルズベク・リンハート）と10歳の弟エルマー（ハーラル・カイサー・ヘアマン）の2人。母親が末期ガンで入院することになったため、2人はコペンハーゲンの養護施設に送られることに。本作がユニークなのは、貧しい中で育ったエルマーが、なぜか宇宙飛行士になるんだという強い夢を持っていること。東西冷戦の時代から核開発競争と共に始まった米ソの宇宙開発競争は、抜きつ抜かれつの様相の中で大きく進展。今や米ソのどちらが先に有人飛行、月面着陸させるかという局面になっていた。しかし、生まれつき足に障害を抱えたエルマーが宇宙飛行士になることを望んでも、そんなことは不可能では・・・？

エリックとエルマーの2人が養護施設に入れたのはラッキーだったが、ヘック校長以下、教師たちはメチャ厳しそう。入所当日、「君は将来何になりたい？」と問われたエルマーが「宇宙飛行士！」と答えると、たちまちぶんなぐられたから、アレレ・・・？予想に反してこの養護施設はかなりヤバそうだ。

そう考えた2人は、入所の日に即脱走！しかし、それくらいのことは校長側も折り込み済みだったらしい。しかも、エルマーは足が悪いから、逃走のスピードは遅い。その結果2人は簡単に捕まえられたが、さあ彼らにはいかなる体罰が？そして、先輩の少年たちからのいかなる嫌がらせやいじめが・・・？

## ■□■ 校長の教育方針の是非は？新任教師のスタンスは？ ■□■

「民主主義」があまねく行き渡った今の日本国の学校では教師も生徒も平等で、先生がへたに生徒にかかわろうものなら、生徒や父母たちからの猛反撃にあってクビ。そんなことになりかねない状況らしい。しかし、日本でも、戦前や明治時代はそれとは全然違う、先生や教師の「権威」がまちがいなく存在していた。そして、良し悪しは別として、体罰もあった。

本作は1960年代にコペンハーゲンの少年養護施設で現実起きた事件を題材にした

もので、ヘック校長の体罰に偏重した厳格な教育方針を批判的にとらえた映画。たしかに本作を観ていると、「これは酷すぎる」と思えるシーンがいくつも出てくるが、そうかといってヘック校長の教育方針がすべて間違っていると言えるのかどうかは微妙だ。ちなみに、私が生涯ベストワンの映画としているロバート・ワイズ監督の『サウンド・オブ・ミュージック』（65年）でも、7人の子持ちで目下独身男のトラップ大佐の教育方針は厳格なものだった。それに、音楽の力と愛の力で風穴を開けたのは、トラップ家に家庭教師として入った修道女マリアだったが、本作でひょっとしてそんな役割ができるのでは？と期待されたのが、新任の女性教師ハマーショイ先生（ソフィー・グローベル）だ。グラウンドで展開されている子供たちへの体罰を部屋の中から驚きの目でみていたハマーショイ先生は、以降この養護施設にいていかなる改革を・・・？

## ■□■弟には意外な才能が！■□■

本作冒頭には、1969年にアメリカの宇宙飛行士ニール・アームストロングが人類史上はじめて月面着陸する映像が流される。私たちの世代の人間はリアルタイムでそのテレビ映像を観ていたが、さて、貧しい母子家庭の間に育ったエルマーはどうやってそれを見ていたの？また、観ていたとしても、「宇宙飛行士になるんだ！」という夢をもつにはそれなりの知識が必要だが、彼はそれをどうやって仕入れたの？さらに、本作全編を通じて彼が持っている宇宙旅行や宇宙飛行士についての情報は多岐に渡り、本作ラストのクライマックスで彼がホントの宇宙飛行士になる（？）についてもその姿形はバッチリだが、それは一体なぜ？ 兄のエリックの方は毎日を生きていくのに精一だが、その面では生命力はあるようだ。しかし、弟のエルマーはそういう能力はゼロながら、宇宙飛行士の知識や、頭の中いっぱい詰まっている夢の量では超一流だから、本作ではその点に注目！

入所当日の脱走の失敗によって、15歳になれば施設を出られるのだからそれまでは服従の仮面をかぶる。何かと現実的（？）なエリックはそのように180度方針を転換し、何とか施設に馴染んでいったが、足が悪いというハンディキャップを抱えるエルマーはなかなかそれができないばかりか、精神的不安定さからおねしょをするようになったから、その体罰や投棄の面でもさらに大変なことに。

このままではエルマーはつぶれてしまう。スクリーンを観ている観客は誰もがそう思ったが、それを救ったのは、エルマーに読み書き能力はもちろん、小説家のように自由に文章を作る能力があることを発見したハマーショイ先生だ。毎年おごなりの文章しか書いてこない親からの手紙に見向きもしない先輩の少年に対して、エルマーが想像力を駆使して文章を豊かにして読んでやった手紙に、先輩は大感激。これにて、エルマーは一躍養護施設の少年たちの「知のアイドル」になることに。そして、エルマーの人並み外れた文章能力を認めたハマーショイ先生は、エルマーを郵便配達係に指名し、校長もそれを認めたから、これによって養護施設におけるエルマーの立ち位置が確立。無事おねしょも収まり、

あとはエリックが15歳になるのを待つだけ。そんな「小康状態」が続くと思われたが・・・。

## ■□■大人はどこまで信用できるの？■□■

13歳と10歳の男の子に、末期ガンが母親の命にどれくらい危険なのかについての知識がないのは仕方ない。そのため、母親が元気になれば自分たちをまた引き取ってくれると2人が期待していたのは当然だ。ところが、ある日の電話で母親の死を知らされたから2人は茫然。しかし、その後しばらくして、唯一の身内である叔父さんが養護施設に面会に来てくれたため、2人はこの叔父さんに再度脱走の計画を持ちかけることに・・・。

この叔父さんが母親の兄なのか弟なのかわからないが、2人に対する優しさは十分。しかし、ヘック校長から厳しく指摘されたように、この叔父さんは定職がなく結婚もできない状態だったから、2人の甥っ子を引き取って世話するだけの能力＝生活する能力がないのが玉にキズ。要は、この叔父さんは人が良く、しゃべる内容も優しいのだが、実行力ゼロ、というレベルなわけだ。しかし、幼い2人にはそこまで大人の能力分析はできないため叔父さんが2人の脱走計画に協力してくれると言ってけると、2人は着々と脱走の準備をするに・・・。ところが、実行の当日になって何とこの叔父さんは「やっぱり協力はできない」とハマーショイ先生に電話してくる始末だから、アレレ・・・。

しかして、その旨を2人に伝えに来たハマーショイ先生は、その挙動不審ぶりをヘック校長に見とがめられた挙句、悪いようにはしないからと言いつめられて、2人の脱走計画を校長に告白してしまうことに・・・。もちろん、そこには様々な「大人の事情」があるわけだが、2人の少年にそこまで微妙なことがわかるはずはない。そのため脱走に失敗し、校長からこっぴどい体罰を受けることになった2人が、ハマーショイ先生に対して裏切者！と呼んだのは仕方ない。しかも、そんな状況下、ハマーショイ先生が思わずエルマーの頬を叩いてしまったから事態は最悪。エルマーのハマーショイ先生に対する信頼は失われてしまったばかりか、ハマーショイ先生の方も自分の行動に嫌気がさしたまま自信を失い、ついに養護施設を離職してしまうことに。

そんな流れの中、大人はどこまで信用できるの？きっと、それがエリックとエルマーの正直な気持ちだろう。

## ■□■15歳の誕生日が来れば・・・その希望の行方は？■□■

このように、まさに八方塞がり、最悪の状況下、2人は再度養護施設での生活を余儀なくされたが、それでもいよいよエリックには15歳の誕生日が近づいてきたから、やっとここから退所できるという新たな希望の中で生活を続けていた。ところが、そこでヘック校長から「それはできなくなったよ」とのお達しが宣告されたから、エリックは絶望状態に。さあ、そこから本作のクライマックスが始まってゆく。

一方では養護施設を監督する国の調査機関の担当者が変わったことによって、より厳格

かつホンモノの抜き打ち調査が開始されるが、それでチェックできることにはやはり限界があることが本作を見ているとよくわかる。そんな状況下、半分ヤケソ、半分国の調査官頼みとも思えるエリックのハチャメチャな行動は如何に・・・？さらに、その結果エリックがヘック校長から受けることになった体罰によってエリックの身体は・・・？

他方、コトがここまでくれば、エルマーも幼いとはいえ、自分の行動方針を自ら確立する必要がある。その結果、彼がとった方策の1つはヘック校長にゴマを挿って一日外出の許可を貰い、「ある布石」を打つこと。そのターゲットは退職したハマーショイ先生と監督官だが、さてそこでエルマーが立てた戦略戦術とは・・・？そして、施設内に戻ったエルマーがとったもう1つの行動は、宇宙飛行士となって空を飛ぶこと。しかし、空想の世界やテレビ画面上の話ならそれでいいが、貯水タンクの塔の上から月に向かってホントに宇宙遊泳したら人間の身体はどうなるの・・・？そんなことは大人だけでなくエルマーにもわかってはいたはずだが、本作のクライマックスではエルマーによるそんな宇宙遊泳シーン(?)が登場するので、それに注目！

ヘック校長が支配する養護施設は、今やこんな大騒動の中で大変な事態に・・・。こんな事態が国の調査機関にバレたらどうなるの？ああ、なるほど、ひょっとしてこれこそがエリックやエルマーが考えた深慮遠謀なの・・・？

## ■□■本作の問題提起から何を学ぶ？■□■

本作は「実話に基づく」物語で、「スパルタクスの反乱」にも相当するエリックとエルマーの勇気ある行動の結果、ヘック校長が支配する少年養護施設には国の厳しい調査が入り、それまでの監獄のような待遇は改められたらしい。さらに、同施設の卒業生からは損害賠償の請求もされているらしい。そして、スクリーン上で見る限り、大ケガをした(させられた)エリックとエルマーは2人とも奇跡的な回復をし、ハマーショイ先生と共に暮らすことになったそうだから、めでたし、めでたしのハッピーエンドになっている。

そんなストーリー展開をみて、本作には『きっと、いい日が待っている』という邦題がつけられたわけだが、そんな本作が今の時代の教育のあり方に投げかける問題提起は極めて重要だ。もちろん、本作の主張の根本はヘック校長の教育方針を批判するものだが、先生の権威があまりにも低下してしまっている今の日本国を見ている私は、一方的にそんな批判ばかりではダメだと考えている。もちろん、エリックとエルマーに対する本作のような体罰が許されるはずはなく、ハマーショイ先生までが辞職せざるを得ない状況に追い詰められた同施設の中で、エリックとエルマーが見せた行動は特筆ものだが、それを英雄視するのも如何なもの・・・？

そんな視点の中、さてあなたは、本作の問題提起から何を学ぶ・・・？

2017(平成29)年9月21日記